

科 目		学 部	学 科	専攻・専修・コース	
文学・芸術とメディアの関わりに関する問題		文芸学部	文芸学科	文芸メディア専修	
受験番号	氏 名			採 点	

以下の文章を読み、続く設問に答えなさい。

メディア史を紐解いてみると、最古の文字が使用されたのは数千年前、その後、ヨハネス・グーテンベルク(1)が（ A ）を発明したのが数百年前、さらに時代をくだって19世紀以降には様々な電気メディア・電子メディアが踵を接して¹発明され、それが近年になってからは各種の／新種のデジタルメディアやソーシャルメディアが爆発的に台頭する、という状況が顕在化しつつある。人間とは自らが作ったメディアによって作られられる存在である—メディア論的にそう考えてみるならば、現代時はまさにその等比数的な変化の“まっただなか”にいる、と考えた方が良さそうである。

社会学者のバウマンは、現代人が直面しつつある状況を「リキッド・モダン」（液体的・流動的な近代）と呼んでいる。彼によるとそのような時代においては、「そこに生きる人々の行為が、一定の習慣やルーティンへと〔あたかも液体が固体へと〕凝固するより先に、その行為の条件の方が変わってしまうような社会」が現出しつつあると理解される。私たちが生きる現代社会は「液体」の隠喩、「液状化」のイメージで表象されるほどに、急激な変容の時を迎えつつあるのだ。

現代人の情報世界は多種多様なデジタルメディア、あるいはソーシャルメディアによって急速に組み変わりつつある。いわゆる“ガラケー”と呼ばれた多機能型携帯電話とは異なり、アプリを加除することでいくらかでも機能をカスタマイズできる“スマホ”のように、昨今の若者たちはLINE、Twitter、Facebook など、手許にある複数のコミュニケーション媒体を組み合わせて—それも自らの所属する文化的グループの基準におうじて—情報世界を巧みにカスタマイズしようとする。そしてそのような技術的前提の変化は、ポストモダンの状況における“文化の島宇宙化”とも称される傾向、つまるところ（“ジャニオタ”にしても“バンギャ”にしても）細分化された小集団、あるいはトライブカルチャーを社会の中で林立させる遠因ともなっている。

近年、私たちがそのなかに生きる記号世界と、（私たちと他者とを、あるいは私たちと世界とを媒介する）メディア・テクノロジーとの関係性は以前にもまして錯綜したものになりつつある。実際に私たちが記号—言葉にしても、あるいは、言葉以外の非言語的な記号にしても—をもちいて展開する思考のプロセスに対して、メディア・テクノロジーが干渉する局面は多々認められる。たとえばオンライン通販サイトの「レコメンデーション機能」—これは過去の購買履歴から特定のユーザーの趣味や関心を割り出し、サイト内でそれと関連するカテゴリーの「おすすめ商品」を推奨してくれるものである。あるいは携帯電話・スマートフォンなどに搭載されている「予測入力」—これはキーボードによる文字入力を省力化してくれるもので、言葉の選択肢を先回りして表示してくれるものである。自分が次に考える可能性があること、次に欲望する可能性があることが、あらかじめテクノロジーによって制御される（中略）。その巨大システムのなかでは、思考や欲望のどこまでが自分由来で、どこからがシステムの要請に応えたものなのかが、実は、それを行行使する本人にとっても判然としないという場合も少なくないだろう。

（出典：松本健太郎編『理論で読むメディア文化 「今」を理解するためのリテラシー』新曜社、2016年、pp.4-5）

1 きびす（又は「くびす」）を接する＝物事が続けざまに起こること

- 問1. 空欄Aに入る適切な語を漢字4～5文字以内で答えなさい。
- 問2. 下線部(1)の人物の出身国はどこか。
- 問3. 「個人化」「パーソナライズ」を手引きとして、現代社会においてメディア・テクノロジーがもたらすメリットとデメリットについて、それぞれ具体例を挙げながら考察しなさい。また情報のカスタマイズ化によってもたらされる功罪について、本文の内容をふまえつつ、あなた自身の考えを述べなさい。（600字～1000字以内）

No. 2

科 目	学 部	学 科	専攻・専修・コース	
文学・芸術とメディアの関わりに関する問題	文芸学部	文芸学科	文芸メディア専修	
受験番号	氏 名			採 点

--

[illegible]

4 ◀600字